
雷心詩

雷星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雷心詩

【Nコード】

N1823L

【作者名】

雷星

【あらすじ】

心の底から浮かび上がる感情のかけらたち。

繋ぎ合わせれば言葉となって詩を紡ぐ。

詩はやがて奔流の如くあふれ出して。

もはやぼくには止められなくなっていた。

つまるところこれは詩集という名の駄文の保管庫。

愛が大事

例えばぼくの背に翼があつて
どこにでも行けるなら
今すぐにも逢いに行くのに

例えばぼくの声が風に乗つて
どこにでも届くなら
今からだつて愛を歌うのに

例えばふたりの間に大河が横たわっていたとして
渡るために必要なものはなんだろう

例えば二人の間に無明の闇が広がっていたとして
照らすために
必要なものはなんだろう

例えばふたりの間で問題が起きたとして
解決するためにいるのはなんだろう

ぼくには愛が必要だ
大きな愛が必要だ
愛で大河を越えようか
愛で闇を照らそうか
愛で問題なくそうか

そうだ

ぼくにはまだまだ愛が足りない

君とぼくの間

君の指がぼくの魂に触れて
想いも記憶も掻き乱す

風の音が聞こえた
晴れ渡る草原のイメージ
君は日の光を浴びて輝く駿馬
ぼくは君の鬣に戯れるそよ風

君の腕がぼくの心を抱いて
想いも記憶も掻き乱す

雨の歌が聞こえた
埋め尽くす雨雲の夢
君は雨風に包まれて踊る蛙
ぼくは君の目蓋に遊ぶ雨粒

君の聲がぼくの耳にきらめいて
想いも記憶も掻き乱す

雪の音が聞こえた
降りしきる白銀の上
君は吹雪に覆われて嘆く兎
ぼくは君の耳に積もる粉雪

君の夢がぼくの裡に広がって
想いも記憶も掻き乱す

月の影が震えた

壊れゆく星の運命

君は滅びに曝されて笑う女神

ぼくは君の命を蝕む病

君の鼓動が聞こえなくなつて

ぼくの存在が消えていく

風の音が聞こえた気がした

石の女

こっちを見てよとあなたは言うわ
いつものように悲しげに

でもわたしは目を向けないわ
一瞥すらも許されないの

あなたがどれほど懇願しても
わたしのことを想っていても
わたしがあなたを想う限り

あなただつて見たはずよ
わたしの部屋に来るまでに

石になつたひとたちを
わたしを殺しに来たものたちを
哀れなほどの成れの果てを

こっちを見てよとあなたは言うわ
いつも見たいに寂しげに

そうね

あなたはわたしを救いに来たわ
理由なんてどうでもいいの
その言葉だけで嬉しくて
わたしはあなたに恋をした
毎日毎日塔を登る

一途で意固地なそんなあなたに

わたしだってあなたが見たいの

さあ

いますぐ盾を掲げてよ

わたしの視線を跳ね返す鏡の盾を

わたしの魔眼が輝いて

わたしを石に変えるまで

あなたの姿を見ていられるわ

愛しいあなたの優しい瞳を

太陽と向日葵

例えば

あなたが太陽なら、わたしは向日葵ですらなくて
わずかばかりの誇りとか、安っぽい気品なんて
あっという間に溶けてしまっわ

せめて

あなたが太陽なら、わたしは向日葵になりたくて
わずかばかりの間でも、安っぽい輝きでいいの
あなたの前で笑っていたいから

そして

あなたが太陽なら、わたしは向日葵になれたかな？
わずかばかりの願いとかが、安っぽい希望なんて
やっぱり燃え尽きてしまっただけ
わたしはここで咲いてるわ

愛しいあなたの目の前で

風舞

その指先が突風となって

その掌が旋風を生む

渦巻く風の中で

あなたはいつもつまらなそう

囁きは風に乗ってどこまでも

まるで不思議な魔法のよう

その細腕が疾風となって

その両腕が暴風を呼ぶ

吹き荒ぶ嵐の真ん中で

あなたはまたもつまらなそう

呟きは風に押されてどこへいく

まるであなたの心模様

風よ

涼風のように歌え

風よ

微風のように踊れ

風よ

颯風のように駆け抜けよ

愛しいひとが笑うまで

愛しいひとが満たされるまで

愛しいひとが望むがままに

あ、あ、
風よ、
風よ

いつか見た夢

あなたの頬にそっと口づけ
いつか見た夢の始まり

哀しみの雨に打たれて
失意のどん底に落ちた
わたしたちは傘もささない
子供のようにはしゃぎもしない
もう、なにもかも忘れたくて

ねえ

どこで間違ったのかな？
わたしの問いは風の中へ
あなたの答えは淡い笑顔
いつか見た夢の途中

戯れに愛を謳って

希望の片鱗にすぎた
わたしたちはあても知らない
大人のように笑いもしない
そう、なにもかも壊したくて

ねえ

どこからやり直せばいい？
わたしの涙は闇の中へ
あなたはわたしにそっと口づけ
いつか見た夢の終わり

失樂園

ぼくらが夢見た樂園なんて
とつくの昔に失われていたんだ

青い太陽が絶望をもたらし
黒い子供たちが影を呼び出したときから

世界樹が姿を現して
数多の悪意が這い出たときから

ほら、君の手に破壊が刻まれた
君は破滅的な痛みを背負わなければならなくなった

ほら、彼の背に雷光が紡がれた
彼は失意と裏切りの海を渡らなければならなくなった

もはや絶望だけがこの世に満ち溢れていく
どれだけ渴望しようとも
ぼくらの願望は叶わない
希望など手に入るはずもない
欲望だけが横たわるんだ

ぼくらは夢を見ていただけなのに
あの輝かしい樂園の日々を

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1823/>

雷心詩

2010年10月13日17時25分発行